

『男女共同参画の視点から防災について考える』

# 防災×思いやり

2011年3月の東日本大震災から9年、2016年4月の熊本地震から4年。昨年10月には台風19号が東日本に上陸し、本町にも大きな被害が出ており、これからも災害はいつ発生するかわかりません。日ごろから防災を意識し、『防災』にならないために、改めて見つめ直ししましょう。男女共同参画の視点から防災について考えます。

問合せ 毛呂山町男女共同参画推進会議事務局（役場総務課内） ☎049（295）2112④312



『男女共同参画』とは、「男だから」、「女だから」という考え方にとらわれず、一人ひとりが平等に扱われ、社会のあらゆる分野における活動に参画し、ともに責任を担うことです。

男女共同参画の視点から防災に取り組むことは、避難所などで多様なニーズに対応することを可能にし、支援の質が全体的に高まることで、より多くの命や暮らしが守られることとなります。

熊本地震では、災害による火災、水難、家屋倒壊などの直接的な被害による「直接死」の約50人に加え、被災によるショックや、避難生活による、呼吸器系疾患、循環器系疾患、突然死、自殺など、災害の直接的な影響ではない「災害関連死」は約200人を超えており、直接死の約4倍の方が災害関連死で亡くなっています。

避難生活では性別・立場による生活の課題があり、さらに、様々な立場の人との集団生活になります。大切な命を守り、被害を少しでも減らすためにも、様々な視点があることを理解し、避難所をみんなが安全に安心して過ごせる場にする必要があります。

## 特集 防災×思いやり

### 過去の避難所生活で起きた問題点

- ・授乳する場所や着替える場所がない。下着を干す場所がない。  
→ 授乳ができないため、赤ちゃんは母乳が飲めず、感染症に・・・  
→ 布団の中などで着替えるしかない・・・
- ・トイレに行きたいけれど夜は仮設トイレは暗いし怖い  
→ 水分を控えることで、脱水症状に・・・
- 他にも・・・
- ・周りから「男性だから!」といわれ、弱音を吐けなかった
- ・地域の少数の男性役員が責任を一手に引き受け、疲労困憊ひろうこんばいに・・・
- ・男性用の失禁パットが欲しかった
- ・同性カップルで避難しても同じ場所で過ごしにくかった
- ・妊娠初期だが、お腹が目立っていなかったので言い出しづらかった
- ・子どもに障害があり、避難所で生活できなかった
- ・避難所で、子どもの夜泣きを注意された
- ・認知症の(夫・妻)が徘徊するので避難所に行けなかった
- ・日本語が解らなくて、情報が得られなかった

男性のなかにも人前での着替えや洗濯物を見えるところに干すこと

避難所のような集団生活では、一人暮らし女性や若年女性、LGBT(性的少数者)の人たちなども大きな困難に直面しがちです。日ごろから多様な人たちの様ざまなニーズに目を向け、自身の意識や考え方を見つめ直すことが、みんなが安心できる環境づくりの第一歩となります。

また、これまでの災害の経験でよく言われていることは、避難所生活での女性用品の配布や更衣室、洗濯物の干し場の確保など、女性の視点に立った配慮やプライバシーの問題です。しかし、それらの配慮は男性には必要ないので

とに抵抗のある人がいます。それは決して特別なことではなく、「男性は我慢できるはず」といった視点で片付けてしまっていることが多いことに気づかなければなりません。

多様な視点とは男女の違いだけに目を向けることだけではなく、年齢や障害の有無、国籍、そして固定した性別へのイメージにとらわれない一人ひとりの人権を意識した配慮に基づく視点です。

みんなが共に支えあう防災に強い地域を作っていくためには、多様な視点を持った地域作りが必要不可欠です。いざというときに各年代層の男女それぞれが持てる力を発揮できるようにしましょう。

## 災害時にこそ、 多様性の理解と 思いやりを...



役場総務課自治振興係(男女共同参画担当)

主査 森村 早苗



# 防災×女性の力

介護や子育て、障害者支援など地域の実態を防災に反映させるためには、女性の力が欠かせません。毛呂山町には家庭や仕事を持ちながら活躍する女性消防団員がいます。

## 毛呂山消防団女性消防隊

毛呂山消防団女性消防隊が誕生したのは、平成18年。現在12人の団員が活動しています。消防団の歴史は、古くは江戸時代の火消しまでさかのぼり、『自分たちの町は自分たちで守る』という精神に基づき、地域の安全と安心を守るために活躍する人が集まる市町村の消防機関の一つです。消防団員は日ごろ、仕事や家庭を持ちながら、いざというときに災害現場に駆けつけるボランティア精神を持った人たちで構成されています。

女性消防団員は、災害発生時の後方支援のほか、でそめしき出初式や特別点検といった式典・イベントでの支援活動や防災啓発活動を行うほか、女性ならではの視点で、災害時に簡単に作れる非常食や、新聞やチラシを使ったお皿作り、子ども向けの防災カルタの普及などを行っています。さらに、救命講習で学ぶ動作を、見た人に楽しく覚えてもらえるように団員たちで考えた「西入間救命体操」を様々なイベントで披露しています。

令和元年台風第19号の際には、

## 特集 防災×思いやり



▲写真上 産業祭りなどのイベントで救命救急の手順を啓発するため、オリジナルの劇と体操を披露しています。前列は「西入間少年少女消防団」。小学生から入団できる消防団です。

▲写真中 応急手当普及員講習を受講し、救命講習の指導員の資格を取得しています。

▼写真下 平成29年8月19日に、埼玉県初となる女性操法大会が開催され、毛呂山消防団女性消防隊が敢闘賞を受賞しました。



本橋 香織 班長

消防団に入ったきっかけは、もともと消防団に興味があり、募集があったので入りました。普段は毛呂山町内で仕事をしています。子ども4人が元気に過ごしてくれており、消防団活動に理解してくれている主人にも感謝しています。消防団に入ってよかったことは、

色々な方と地域防災を通じて交流できることと、たくさんの方を学ぶ機会をいただき、成長させてもらっていることです。日ごろより、町民の皆様には大変お世話になっています。たくさんの暖かい言葉に、いつも励まされています。これからも皆様が安心、安全な生活が送れるよう活動して参ります。

\*\*\*\*\*

以前、群馬で働いていたときに火事の第1発見者になり、そのとき火災の恐ろしさを目の当たりにし、毛呂山町には女性消防団があることを知って、町民の方に火災にならないための啓発活動がしたくて、入団しました。



馬場 奈津子 団員

やりがいを感じる時は、住民の方から「頑張ってるね」と声を掛けてもらえたときです。また、町民の方や消防職員など、いろんな人とのつながりができたことがよかったです。女性消防団が活動していることを、皆さんにもっと知っていただきたいですね。

町内を巡回し避難勧告の出た地区を1軒ずつ訪問して、避難の呼びかけをしたり、消防団本部が各分団に指示を出すお手伝いを行いました。

近年、異常気象を原因とした台風や集中豪雨が毎年のように発生しており、本町においても災害がいつ発生するかわかりません。災害が発生すると、被災者のなかでも性別や年齢、障害の有無、被害の程度で抱える困難は異なり、それぞれ必要とする支援や避難生活での優先事項も異なります。

「防災」という言葉は未だに「男性が担う力仕事」というイメージがあります。が、昼間、災害が起きた場合、家にいる可能性が高いのは女性や子ども、そして高齢者です。そうした人々の安全・安心を守るためには、男性の視点からだけでなく、平常時から女性の視点からも災害対応に備えておくことが大切です。

子育てや介護といった家庭での役割を中心的にこなしながら、さらには仕事を持ちながら活動する女性消防団員。毛呂山町にとって、なくてはならない心強い防災組織の一つです。

# 防災備蓄×家族みんなの視点

乳幼児がいる、アレルギーがある、要介護者がいる……。それぞれの家庭、個人によって事情は様々です。今、災害が起きたら何日過ごせますか？ 最低限の防災グッズにプラスして、我が家にとって、また、ご本人にとって、いざというときに必要な備えを考えてみましょう。

## ●個人や家庭の状況に応じて備蓄・準備をしましょう

### 《女性向け》

- 生理用ナプキン
- サニタリーショーツ
- おりものシート
- 携帯用ビデ
- カップ付タンクトップ
- リップクリーム
- ハンドクリーム
- 化粧水
- 防犯ブザー・笛

### 《高齢者向け》

- 服用中の薬
- お薬手帳や処方箋
- 紙おむつ・尿取りパッド
- めがね・補聴器
- 入れ歯
- 栄養補助ゼリー
- 情報メモ（緊急時の連絡先や持病のかかりつけ医、薬など）

### 《子育て家庭向け》

- 母子手帳のコピー
- 紙おむつ
- おしりふき
- ミルク・哺乳瓶・消毒液
- 離乳食
- アレルギー対応食
- おもちゃ、お菓子
- 情報メモ（保護者の名前や住所、アレルギーなど）

## ●自宅避難用の備蓄品

災害が起きても自宅が安全ならば、避難所ではなく自宅で生活ができるように、飲料水と非常食のほかに備え（家族分）をしておきましょう。

- LEDランタン：3つ（リビング・キッチン・トイレ用）
- カセットコンロ、カセットボンベ：15本（1か月分）
- 口腔ケア用ウェットティッシュ
- 体ふき用ウェットティッシュ
- ラップ
- 携帯トイレ：65枚（7日分）
- マッチ・ろうそく
- ポリ袋（小・中・大）
- トイレットペーパー
- 新聞紙（朝刊7日分程度）
- 軍手

## ●3日以上の水・食糧を備蓄する

### 飲料水の備蓄量



1人3L 家族の人数分

1日1人3リットル、最低3日分、できれば7日分用意しておく。

●あわせて、自宅近くの給水ポイントもチェックしましょう。

### 7日間備蓄を実現するための知恵

#### 1～3日目

冷蔵庫・冷凍庫にあるものを食べる。普段から冷蔵庫・冷凍庫に食材を多めに買い置きしておく。停電時は、クーラーボックスに保冷剤と食べ物を入れて保存する。



#### 4～7日目

「ローリングストック法（※）」で備蓄した非常食を食べる



缶詰・レトルト食品



乾麺



フリーズドライ食品



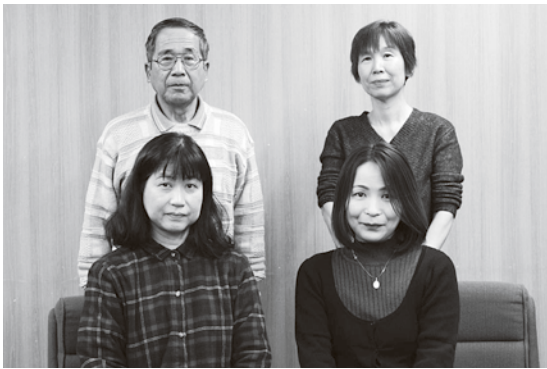
乾物

食べ慣れた好ゆで時間の短いものがおすすめです。災害時に不足しがちなミネラル・食物繊維を補給。少量のお湯で温かい食品に。野菜も取れます。

※「ローリングストック法」とは備蓄した食糧・水を少し多めに用意し、定期的に古いものから順に食べ、食べた分を買い足し補充する備蓄法です。

※ 埼玉県「防災マニュアルハンドブック命を守る3つ自動編」より引用。「イツモ防災」で検索ください。

## 特集 防災×思いやり



▲男女共同参画推進委員 岩上委員（前列左）、小林委員（前列右）、中村委員（後列左）、安谷屋委員（後列右）

### 男女共同参画・人権教育指導者研修会

「避難生活で命と健康、本当に守れますか？」

令和元年9月27日東公民館にて、浅野幸子さん（滅災と男女共同参画研修推進センター共同代表／早稲田大学地域社会と危機管理研究所招聘研究員）を講師に研修会を開催しました。研修会では高齢者、障害者、子ども、女性などの視点から、震災時にはどのようなことが起こるのか、性別、立場による避難（所）生活上の問題についてなど、熱心にご講演いただきました。

### 研修会に参加して……

男女共同参画推進委員

安谷屋雅子委員  
あだにやまさこ

避難生活での性別や立場から起こる問題の多さに驚きました。健康被害、トイレ問題、プライバシー、個別に必要な物資不足（排泄用品、生理用品等）など生死に係る内容もあり、どう対応していくのが今後の大きな課題と思います。研修では男女等の性差や各年齢・様ざまなハンディを理解して必要な対応や支援の段階からの取組や、立場別のリーダーも必要であることを学びました。普段から各立場の人が意見交換できる機会もあればと思います。

まずは自分や家族でできる防災、そして地域防災を知り支援内容もチェック。ご近所様と防災について話す機会も大切かと。そして防災は特別なことではなく日常的なこととしてとらえ、性別等にこだわることなく様ざまな配慮も日常であるよう心がけていきたいと思えます。

# 防災×地域の絆きずな

## 防災は、 日常のコミュニティ活動が大事です



役場総務課消防防災係  
係長 小山 正史

災害時、とくに性別や年齢、生活習慣などが異なる様ざまな人が暮らす避難所では、平常時における社会の課題がより一層現れやすくなります。性犯罪等を予防するため、昼夜を問わず安心・安全な環境の整備が必要となります。そのため、日ごろから家庭、職場や地域において男女共同参画を実践しつつ、自主防災組織等を通して、地域のコミュニティー活動を行っていただくことが重要です。女性でも主体的に地域のリーダーとしての役割を担い、多様な視点を取り入れて、男女が互いに支え合う地域づくりに参加されることを期待します。

町でも毛呂山町地域防災計画に基づき、女性に配慮された避難所の環境整備や安心・安全の確保に努めています。